

# 〈安全な場所〉はどこにあるのか？

安全に働いて生計を立てるための女たちの闘い

信藤玲子

イ・ソンス 著  
古川綾子 訳

▶ヘルプ・ミー・シスター

11・20刊 四六判356頁 本体2000円  
アストラハウス



芸術

二〇二二年に韓国で発表された小説『ヘルプ・ミー・シスター』では、宅配業者をはじめ、母のヨスクさんが「一緒にやろう、ひとりで行かないで、一緒に」を繰り返す場面が描かれている。一家の家長であるスギョンは、性暴力の被害者になりかけて会社を辞めざるを得なくなった。両親と夫、そして甥っ子たちを食へさせなければならぬのに、「性別によるリスクを克服できない自分」を責める。安全な場所として定期的な収入を得るために、他人と関わらずに働ける宅配業者を選択する。

だが、宅配業者は安全な場所なのだろうか。宅配員は直接雇用ではなく、派遣ではない。配達業務を委託された個人事業主であり、「アプリやウェブみたいなプラットフォーム」によって仕事を請ける「サイバープロレタリア」である。安全教育もなく、保険にも加入させてもらえない。訪問先で男が女に暴力を振るっている場面に遭遇したり、損害が生じると自腹で弁償したりすることもある。スギョンは配送アプリに従って荷物を運び続けるが、「生涯続けたいと思える仕事なんてあるのかな、死ぬまで人とかかわらないでという決心は続くのかな」と疑問を抱く夜もある。

ない。女たちに働かせて遊びをさせる。この闘いはスギョンの夫であるウジエは心やさしく、まっとうな倫理観を持ち合わせている人間だが、会社の業務で心身をすり減らした挙句、専業投資家として稼ぐ夢に賭けて会社を辞めた。スギョンの父であるヤン・チョンシク氏は、若い頃「どこに行ってもハンサムだ」と言われるというのが拠り所であったが、投資詐欺にあって全財産も拠り所も失った。この家の男性陣は、安全な場所でも安全に働いて生計を立てることからどうに排除されている。甥っ子たちを残して失踪したウジエの兄と異なり、家に留まっているだけでも最低限の責任を果たしているのかもしれない。漢江の橋から川面を見下ろさずに生きているだけで精いっぱいなのだ。

ここで想起されるのが、二〇二四年に日本で大ヒットした映画『ラストマイル』だ。この映画も、火野正平和宇野祥平が演じる親子が宅配便の車に乗っている場面からはじまる。大手ショッピングサイトを狙った犯罪を扱うサスペンス映画において、この親子は日本全国にくまなく広がる流通網の末端に位置する存在として描かれている。宇野祥平演じる息子は、勤めていた会社の倒産によって、父が生業としてきた宅配業を引き継ぐこととするが、薄給なうえに、まともに食事もとれない非人間的な働き方に疑問を抱く。

だが『ヘルプ・ミー・シスター』は過酷な状況に陥っているにもかかわらず、雨上がりの空から差し込む光のようなものがほの見える。そのひとつは、スギョンに寄り添って再起を応援する女たちの存在だ。知人の娘である大学生のボフや、甥っ子のガールフレンドである中学生のウンジといた若い世代が、スギョンを傷つけた世界に怒りを抱き、スギョンが失った安全な場所を取り戻すために、それぞれのやり方で闘うこと

なにより、スギョンとヨスクさんがけっして絶望せず一絶望している暇なんてないのだ。生計を立てるために働かなければならないのだから――前を向いて歩く姿に読者は希望を見出すだろう。スギョンはもつと安全な仕事を探すために「ヘルプ・ミー・シスター」という新しいアプリを手に入れ、スギョンの助手席に乗っていたヨスクさんは運転を練習し、自らハンドルを握って行動の自由を手に入れる。

この小説が初の邦訳書となる作者のイ・ソンスは一九八三年生まれで、日本の就職氷河期世代と同様に、大学を出てから配達員などの非正規の仕事を経験を活かして、非人間的な職場で働く人々の葛藤を描くことに成功している。二作目の長編小説でありながら、ユニモラスな筆致で登場人物を肉付けし、誰ひとりとして単なる脇役ではない群像劇を見事に作りあげている。

『ラストマイル』では、荷物に任付けられた爆弾によって、顧客と大手宅配業者の安全が脅かされるなか、霧細配達員である父子の良心が安全な場所として機能した。けれども、下請け労働者めぐる構造的な問題は解決されていない。

『ヘルプ・ミー・シスター』も同様だ。たとえアプリが新しくなっても、サイバープロレタリアの境遇が改善するわけではない。それでも、女たちの関係そのものが安全な場所として「ヘルプ・ミー・シスター」の役割を果たし、「一緒にやろう、ひとりで行かないで、一緒に」という呼びかけは心強い助けになるだろう。

(翻訳者)ライター／大阪翻訳ミステリー読書会世話人

図書新聞 2025年2月15日